修士論文（要旨）
2018 年 7 月

中国人日本語学習者の日本語推測表現の習得について

指導　齋藤伸子　教授

言語教育研究科
日本語教育専攻
216J3901
譚翔宇

Master's Thesis(Abstract)

July 2018

On the Use of Conjectured Expression by Chinese Learners of Japanese

XiangYu Tan
216J3901
Master's Program in Japanese Language Education Graduate School of Language Education J.F.Oberlin University
Thesis Supervisor: Saito Nobuko

目次

第 1 章 はじめに 1
1.1 研究背景 1
1.2 問題点と調査目的 2
1.3 研究意義 3
第 2 章　先行研究 4
2.1「推測表現」に関する先行研究 4
2.2 中国人日本語学習者のモダリティの習得に関する先行研究 7
2.3 中国語の「語気」に関する先行研究 8
2.4 中国人日本語学習者が陳述副詞の習得に関する先行研究 8
2.5 母語転移に関する先行研究 9
2.6 母語干渉に関する先行研究 9
第 3 章 調査概要 11
3.1 調査協力者 11
3.1.1 アンケート調査の協力者 11
3.1.2 インタビュー調査の協力者 13
3.2 調査方法 13
3.2.1 調査 1 アンケート調査 13
3.2.1.1 アンケート調査の内容 14
3.2.2 調査 2　インタビュー調査 15
3.2.2.1 インタビュー調査の内容 16
第 4 章　調査結果及び分析･考察 17
4.1 アンケート調査の分析結果 17
4.1.1 アンケート調査の図① 17
4.1.2 アンケート調査の図② 19
4.1.3 アンケート調査の図③ 21
4.1.4 アンケート調査の図④ 23
4.1.5 アンケート調査の図⑤ 24
4.1.6 アンケート調査の図⑥ 26
4.1.7 アンケート調査の図⑦ 28
4.1.8 アンケート調査の図⑧ 30
4.1.9 アンケート調査の図⑨ 31
4.1.10 アンケート調査の図⑩ 33
4.2 アンケート調査の分析結果 35
4.3 インタビュー調査の分析 39

4.3.1 協力者の推測文末表現への理解 39
4.3.2 協力者の推測文末表現の接続への理解 43
4.3.3 協力者の日本語陳述副詞への理解 46
4.3.4 協力者が推測表現を習得する方法 50

第 5 章　中国人日本語学習者の日本語推測表現の習得傾向及びその形成要因について　52
5.1 中国人日本語学習者の日本語推測表現の習得傾向 52
5.2 習得傾向の形成要因 53
5.2.1 母語の影響 53
5.2.2 教師と教材における問題 54
5.2.3 接触場面 54

第 6 章　日本語教育への提案 55

第 7 章　本研究のまとめ及び今後の課題 56
7.1 本研究のまとめ 56
7.2 今後の課題 56

参考文献 I

資料 i

要旨

私たちは、事物に対して、はっきり確定できないことが多いので、不確定の判断や認識を表す表現をよく使う。推測とは物事の状態・程度や他人の心中などを推し量ることである。そのような言語表現は、推測表現あるいは推測モダリティと呼ばれる。そのような表現はどのような言語にも存在しており、日本語と中国語にも大量に存在している。日本語でも、中国語でも、推測表現の表す意味は豊富で、表現形式も複雑である。一方、グロバル化につれ、中国人日本語学習者数が増えている。中国人日本語学習者は学習の過程で、母語からの干渉、教師の教え方などの要因により、推測表現をうまく習得しにくい。そのため、中国人日本語学習者は不適切な推測表現を使っていることが多い。

本研究では、「だろう、かもしれない、に違いない、らしい、はずだ、そうだ」の六つの推測表現の習得状況と習得傾向を調べ、以下のことを目的とした。それぞれの習得現状と習得傾向を明らかにする。

(1) 中国人日本語学習者はどのように推測表現を習得しているのか。

(2) 推測表現を使うとき、どうやって文末表現を選んでいるのか。決める理由は何か。

(3) どうやって副詞を選んでいるのか。決める理由は何か。

(4) 中国人学習者の推測表現の使用は、どのような傾向を呈しているか。その傾向が形成される原因は何か。

第 1 章では、研究背景、問題点、調査目的及び研究意義を記述した。第 2 章では、日中両言語の「推測表現」と母語転移に関する既存の研究について記述した。第 3 章では、本研究における調査対象の選定、データ収集のためのアンケートとインタビューの作成目的・方法と分析方法について記述した。

第 4 章では、まずアンケート調査で得たデータに基づき、中国人日本語学習者の推測表現の使用傾向をまとめた。その傾向が形成された原因を追究するために、協力者 K1、K2 と K3 を選び、インタビュー調査を行った。インタビュー調査のデータに基づき、協力者の推測表現の接続用法、陳述副詞への理解と、推測表現を習得する方法を帰納して整理を行った。

第 5 章ではアンケート調査とインタビュー調査の結果に基づき、①日本語協力者が推測表現を使う時に、「だろう」を選ぶことが多く、「らしい」、「そうだ」と「はずだ」の使用を避ける、②日本語学習者は「陳述副詞＋推測文末表現」のような形を使うことが多い、③日本語学習者が日本語を勉強する期間が長くなると、文法の問題にますます注目しなくなる、という三つの傾向を導き出した。その傾向が形成された要因について、母語の影響、教師と教材における問題、接触場面という三つの面から考察した。

第 6 章では、第 5 章で提出した形成要因に基づき、教師は日本語推測表現を教える時に、中国語と結びつけるだけではなく、使用場面、人物関係などの要素を考える必要があること、協力者は、日本語母語話者とメディアからの自然会話を学習の素材として、使用する方法が望ましいこと、日本語学習者自身は意識しながら、文法の間違いを重視すること、日本語学習者は日本人が推測表現を使う心理を分かる必要があること、という四点に分けて日本語教育への提案を考えた。

最後に第 7 章では、第 1 章から第 6 章までで得られたことをまとめて、本稿の総括とした。

参考文献

スリーエーネットワーク (2016) 『みんなの日本語　初級』　第２版　倉敷印刷株式会社
ネウストプニー J.Ｖ (1995) 『新しい日本語教育のために』 大修館

宇佐美まゆみ　(2007)　「改訂版：基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese:BTSJ）2007 年 3 月 31 日改訂版」 『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』平成 15-18 年度　科学研究費補助金　基盤研究 B（2）（研究代表者　宇佐美まゆみ）研究成果報告書
大島弥生 (1993)「中国語･韓国語話者における日本語のモダリティの習得に関する研究」『日本語教育』81 pp.93-103.
奥村徹 (2006) 『中国人日本語学習者に対する 初級文法事項導入の際の留意点について』東京外国語大学 留学生日本語教育センター論集 32:167-176
佐々木泰子・川口良 (1994) 「日本人小学生・中学生・高校生・大学生と日本語学習者の作文における文末表 現の発達過程に関する一考察」『日本語教育』84 pp.1-13.
寺村秀夫 (2003) 『日本語のシンタクスと意味　第Ⅱ巻』　くろしお出版
仁田義雄(1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
仁田義雄/益岡隆志（1989）『日本語のモダリティ』くろしお出版
日本語教育教材開発委員会 (2006) 『学ぼう！日本語』　専門教育出版
益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版
益岡隆志（2007）『日本語モダリティ探求』くろしお出版
宮島達夫･仁田義雄（2003）　『日本語類義表現』くろしお出版 pp.171-203
森山卓郎･仁田義雄･工藤浩 (2000) 『日本語の文法〈3〉モダリティ』 岩波書店

洪蓓 (2012) 中文母语日语学习者的副词习得研究　硕士论文 湖南大学
齐沪扬（2002）《语气词语语气系统》 安徽教育出版社
張麟声 (2001a) 『日本語教育のための誤用分析 中国語話者の母語干渉 20 例』
張麟声 (2001b) 『中国語話者のための日本語教育研究入門』 日中言語文化出版社